

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：32680

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K20769

研究課題名（和文）集中治療室に入室した患者の家族の心的外傷後成長に着目した家族支援に関する研究

研究課題名（英文）Study on family support focusing on resilience of family members of patients at admission to the intensive care unit.

研究代表者

小町 美由紀（長谷川美由紀）（Komachi, Miyuki）

武蔵野大学・看護学部・講師

研究者番号：60459641

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：集中治療室（Intensive Care Unit：ICU）に入室した患者の家族の心的外傷性ストレス症状（Posttraumatic Stress Symptoms：PTSS）を減弱する家族支援を構築するために、困難に直面した時に成長できる能力であるレジリエンスに着目し、家族のPTSSとレジリエンスの関連を明らかにした。質問紙を用いた調査を実施した結果、高いレジリエンスを有する対象者の割合は、10.5%であった。また、レジリエンスとPTSSに有意な関連が認められた。以上の結果から、レジリエンスは、ICUに入室した患者の家族のPTSSを減弱する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ICUに入室した患者の家族が有するレジリエンスの実態および、レジリエンスとPTSSの関連を学術的な方法で明確にした。また、レジリエンスが家族のPTSSを減弱させる可能性があることを明らかにしたことで、家族のレジリエンスを高めることを目指した支援の基礎を提案することが可能となった。このことから、ICUに入室した患者の家族に有用な支援の構築の基礎資料を得ることができ、その課題も明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：To build family support to reduce posttraumatic stress symptoms (PTSS) of family members of patients at admission to the intensive care unit (ICU), this study clarified the relationship between resilience and PTSS, focusing on resilience, the ability to grow when faced with difficulties. Results of a survey using a questionnaire, the prevalence of resilient was 10.5%. resilience was significantly associated with PTSS. From the above results, it suggested that resilience could reduce stress.

研究分野：家族看護学

キーワード：レジリエンス 心的外傷後ストレス障害 集中治療後症候群 集中治療室 家族支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

集中治療室 (Intensive Care Unit : ICU) に入室した多くの患者は鎮静剤の投与、呼吸器の装着がなされているため、昏睡状態でありコミュニケーションがとれない状態である。

2002年から2005年までの厚生労働省の調査によると、1年間の手術実施件数は増加しており、2008年から2014年までにICUに入室する患者数も増加している。

ICUに入室した患者の家族は、患者が血液に汚染されている姿、多数の医療機器が装着されている姿、および体に多数の管がつながっている等の姿を見て、ICUに入室する前の姿と比較し衝撃を受ける。これらの経験は家族に深刻な精神的ストレスを生じさせるが、このような精神的ストレスを家族の集中治療後症候群 (Post Intensive Care Syndrome-Family: PICS-F) という。PICS-Fは急性ストレス症状、心的外傷性ストレス症状 (Posttraumatic Stress Symptoms: PTSS)、心的外傷後ストレス障害 (Posttraumatic Stress Disorder: PTSD)、不安、抑うつ、複雑性悲嘆を生じる。

このような精神的ストレスを生じている状況で、ICUに入室した家族は2つの役割を担わなければならない。1つ目は、医療従事者から患者の治療方針について説明を受けることである。2つ目は、その医療従事者からの説明を聞いたうえで患者に代わって治療方針に関する決定をしなければならないことである。これらの患者の生命に関わる役割は非常に重要であり、家族は精神的苦痛を伴う。このように家族がPICS-Fを生じている状況で、家族がレジリエンスを高めることは重要な意味を持つ。

レジリエンスは精神的に外傷的な出来事もしくはストレスフルな状況を、肯定的に受け止める能力のことである。研究者によって様々な定義を述べているが、2003年にConnor and Davidsonは、レジリエンスは困難に直面した時に個人が成長できる能力であり、PTSDを抑えることができる可能性がある、と定義している。

レジリエンスの研究は1950年代から行われるようになった。1970年代には、貧困層の人々、精神疾患を有する患者の子どもなど、ハイリスクの子どもを対象に研究が行われた。1990年代に研究対象が拡がり、軍人、交通事故被害者、被災者にも調査が実施された。2000年代から、HIV患者の家族、アルツハイマー患者の介護者、認知症、がん、緩和ケア患者の家族という病状の回復が困難な患者の家族のレジリエンス研究が行われるようになった。

ICUに入室した患者の家族のレジリエンス研究は、近年、実施されるようになった。Sottileら(2016)は、48時間以内にICUに入室した患者の家族のレジリエンスと精神的苦痛の関連を検証している。Sottileらは、対象者の49%が高いレジリエンスを有する個人であるレジリエント (CD-RISC (the Connor-Davidson Resilience Scale) 得点が82点以上の対象者) であり、レジリエンスと有意な関連があったのが、対象者の不安 (odds ratio [OR] = 0.19; p=.001)、抑うつ (OR = 0.17; p < .0001)、急性ストレス症状 (OR = 0.23; p = .005) であった。レジリエンスを従属変数とした重回帰分析を行った結果、有意な関連があった要因は、ICUでのケアの満足度 (β = -2.2; 95% confidence interval [CI]: 0.61 - 3.83; p = .007) であった。またShafferら(2016)は、脳外科ICUに入室した患者の家族の精神的負担とレジリエンスの関連を調査した。彼らもまた、家族のレジリエンスは精神的負担と関連があることを報告している。これらの2つの先行研究は、レジリエンスがPICS-Fを含む精神症状を軽減することを示唆している。しかしながら、家族のレジリエンスと精神的負担の関連のみならず、患者と家族の属性とレジリエンスの関連を検証した先行研究はあまりみられない。

急性ストレス症状を含むPICS-Fのような深刻なストレスは、治療を必要とするPTSD

の予測的要因になることが報告されている。そのようなストレスが継続すると家族機能の悪化を引き起こし、家族機能不全に陥ってしまうハイリスクな状況になる。そして、患者の治療に悪影響を及ぼす可能性がある。よって、PICS-Fを引き起こすことを予防し適切な支援を提供できるような家族支援の構築が必要である。そのためハイリスクな家族に、PICS-Fを生じるリスクの有無を評価し、適切なサポートを提供するべきである。そのために早期に家族の属性やレジリエンスを評価し、スクリーニングを実施しなければならない。ゆえに、本研究では PICS-F の症状の中の特に急性ストレス症状に焦点をあてて、ICU に入室した患者の家族のレジリエンスを調査することとする。

2. 研究の目的

本研究では以下の 3 つを目的とし、これから開発を予定している家族のための支援プログラムの基礎資料とすることを旨とする。

- (1) ICU に入室した患者の家族のレジリエンスの程度を定量的に明らかにする
- (2) 家族の急性ストレス症状とレジリエンスの関係を明らかにする
- (3) 患者および家族の属性とレジリエンスの関係を明らかにする

3. 研究の方法

(1) 対象

集中治療室に入室した患者の家族で、本研究で設定した包含基準に合致した家族を対象者とした。その包含基準は ICU 退室後一般病棟に入院している患者の家族 患者の重要他者(例:患者の配偶者・子ども・両親) 担当医師もしくは病棟管理者から調査実施許可を得た家族 20 歳以上 研究参加同意に関する説明を実施するのが可能な状態の家族 日本語の読み書きが可能な者、の 5 項目である。除外基準は 患者が一人暮らしである 本研究の対象となりうる患者の他の家族が療養中または介護中である、の 2 項目である。

(2) データ収集

先行研究を参考にし、本調査のために作成した質問紙を使用し調査を実施した。

調査を実施した施設は、2 つの医学部付属病院の集中治療室で約 35 床のベッドを有している。入室する患者は、で内科系および外科系の重症な患者が収容されていた。

具体的な調査方法は、上記で設定した包含基準に合致した患者の家族に、研究内容の説明と、いつでも研究をやめることが可能であることなどの内容が含まれた倫理的配慮について説明し、質問紙と同意書を渡した。研究参加に同意した家族は、その同意書と質問紙に記入し、記入済の質問紙と同意書を研究者宛に郵送してもらった。この質問紙調査は、東京大学大学院医学系研究科倫理審査委員会の承認を得て行った。

調査項目は、家族および患者に対応して作成した。家族の質問紙は、属性に関する質問項目、日本語版コナー・デビッドソン回復力尺度、改訂出来事インパクト尺度日本語版であった。患者の情報は、電子カルテから転記した。

(3) 分析方法

患者および家族の属性について、記述統計を明らかにした。家族と患者の属性及び家族の急性ストレス症状について、レジリエンスとの関係を明らかにした。その結果を基に、次の多変量解析に必要な項目を選定し、レジリエンスに影響を及ぼしている要因を明らかにし

た。統計の信頼性を高めるために多重共線性の検証を行った。変数選択基準は $p < 0.2$ 、有意水準は $p < 0.05$ (両側検定) とした。すべての統計解析は SPSS for Windows (Ver.23) を使用した。

4. 研究成果

レジリエンスである CD-RISC の平均得点は、57.4 点 (標準偏差 = 18.1) で、高いレジリエンスを有する対象者 (CD-RISC 得点が 82 点以上) の割合は 10.5% であった。急性ストレス症状である IES-R の平均得点は 17.4 点 (標準偏差 = 16.5) で、深刻な急性ストレス症状を有する対象者の割合は、23.4% であった。

ICU に入室した患者の家族の平均年齢は 54.6 歳で、68.8% は女性であった。対象者のうち 3 人は精神疾患を有した経験があった (表 1)。患者について、平均年齢は 64.1 歳で 32.5% は女性であった (表 2)。患者が ICU に入室する原因となった疾患について、急性虚血性心疾患が最も多かった。

家族のレジリエンスに影響を与えている要因は、4 つの要因であった。急性ストレス症状 ($B = -11.98$, $\beta = -0.27$; $p = .01$)、家族の年齢 ($B = 4.75$, $\beta = 0.26$; $p = .021$)、患者の性別 ($B = 10.09$, $\beta = 0.25$; $p = .015$)、家族の精神疾患の既往歴 ($B = -23.41$, $\beta = -0.25$; $p = .024$) であった。

以上の成果から、レジリエンスが低く、精神的ストレスに脆弱な特徴を有している家族が多いことが明らかになった。また、このような家族は、年齢が高く、入院患者が男性であり、対象者本人が精神疾患既往歴を有している特徴があった。さらにレジリエンスは、家族の急性ストレス症状を減弱する可能性が示唆された。これらのことから、本研究の結果は、家族のレジリエンスを高め、重症な患者の家族を支援するサポートシステムを構築する重要な基礎資料となると考えられる。

表1 家族の属性

	n	%	Mean	SD
年齢			54.61	11.93
性別	女性	53	68.83	
患者との関係	配偶者	39	50.65	
	子ども	23	29.87	
	両親	6	7.79	
	きょうだい/その他	9	11.69	
家族の精神疾患既往歴	3	3.9		
家族の喪失経験	69	89.6		
1か月以内のストレスフルな出来事を経験	25	32.47		

表2 患者の属性

	Mean	SD	
年齢	64.06	13.78	
APACHE II score	14.4	8.83	
ICU滞在期間	85.45	84.95	
呼吸器装着時間	59.14	76.62	
	n	%	
性別	女性	25	32.5

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Miyuki H. Komachi, Kiyoko Kamibeppu	4. 巻 9
2. 論文標題 Association between resilience, acute stress symptoms and characteristics of family members of patients at early admission to the intensive care unit	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Mental Health & Prevention	6. 最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Miyuki H. Komachi and Kiyoko Kamibeppu	4. 巻 4: 47
2. 論文標題 Posttraumatic stress symptoms in families of cancer patients admitted to the intensive care unit: a longitudinal study	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of intensive care	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Miyuki H. Komachi and Kiyoko Kamibeppu
2. 発表標題 Personal Resilience and Post- traumatic Stress Symptoms in Families of Patients Admitted to the Intensive Care Unit in Japan.
3. 学会等名 12th Nursing and Healthcare Congress（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----